



今回とりあげる時期は19世紀後半以降である。受け皿がどのように用意されていたか、その西欧思想をどのような形で消化しようとしたのか？ 個々人の事績を掘り起こすことでその端緒に就きたい。

稲垣尚友
竹大工・作家

トカラから考える、近代日本の「呑み込む」力

洋癖

ようへき、やう——【名】
西洋の物事や様式を過度に好むくせ。西洋かぶれ。

(大辞林)



馬場佐十郎とロシア人のゴローニン、森有礼とその妻の広瀬常、内村鑑三と弟子の佐藤宗次郎、長岡半太郎と外国雇い科学者といった、対になっている縦横の関係を触れることで、洋学の消化力を問う。あまりの積極的な消化行為が「洋癖」として指弾された者もいる。



一方その同時代にトカラでは何が起っていたか？ セントヘレナに流されていたナポレオン三世にいち早く琉球の報告をしたイギリス使節団だが、トカラの報告はなかったのか？

それと前後して、琉球からフランスに戻った宣教師が、琉球の後ろ盾である小国にトキカラ(トカラ)があるとの報告をしている。トカラ列島の南端に位置する宝島ではイギリス商船の乗組員と銃撃戦が起こり、それが幕府をして外国船打払令を敷かせることになった。では、こうした交流が島に「洋癖」をもたらすことはなかったのか？ いままさに、周縁から「洋癖」探査の手が下されようとしている。



2014.3.29 sat/14:00-

会費

持てる者は持てるだけ (カンパ制)

場所

武蔵野市本町コミュニティセンター第2会議室 (3F)
東京都武蔵野市吉祥寺本町 1-22-2 / 吉祥寺北口 (JR 中央線・井の頭線) 徒歩 3 分 ヨドバシカメラ裏

参加連絡

090-4713-1299 (稲垣一雄)
080-5085-2477 (橋爪太作)
info@tokarajuku.sakura.ne.jp

主催

文化結社トカラ塾 (<http://www.tokarajuku.sakura.ne.jp/>)

